

親鸞の言語観

野村伸夫

一、序、思想史と思想

思想史として宗教を追求するということは固有名詞との密接な関連において研究が進められるという特性を持つ。たとえば特定の歴史的人物との関連に於ては、その追求はその人物が仏陀や神とその救済をどのように考えたかを論ずるといふ、特定の歴史的人物に関する研究になる。あるいは特定の人物を扱う場合以外でも、重要な、議論の対象としての伝統的な用語（例えば二十五の各論題）を記号化・固定化して、記憶すべき情報・知識としてそれらを扱うならば、その用語を固有名詞として扱っていることになる。これらの場合特定の人物の固有の名前や固有名詞的な用語が常に不可欠な要素であつて、これなくしては研究・論文は成立し得ない。また思想史として宗教を追求するということはそこにおいて固有名詞が不可欠な要素であるが故に、知識・情報の伝達に終始するという傾向に陥りやすい。これは正しく素人や門外漢を寄

せつけない専門家の牙城となるであろう。

固有名詞が言葉（普通名詞）本来の意味を失つて知識・情報あるいは記号になつてしまつてゐるのに対して、普通名詞が常に意味を伴い、それから離れられないことを考慮すれば、以上の思想的宗教研究が固有名詞を抜きにしては考えられないことは明らかであろう。それに対して、思想として宗教を追求することは、固有名詞を持った特定の人物などを例として扱うことはあつてもそれが研究の本質的部分では決してなく、反対に普通名詞つまり言葉の意味を重ねることによつて思想つまり（ことわり理）を明らかにしようという追求の仕方であると言ひ得る。思想として宗教を追求するということは、従つて、無限者としての仏陀や神と有限者である衆生・人間との関係や宗教的救済の意味そのものを追求することである。

親鸞の宗教思想を追求する領域はいわば思想史的追究という傾向が強かつたように思われる。つまり阿弥陀仏による救済を親鸞がどのように考えたかを追求するという側面が強い

のである。親鸞の宗教思想を追求、敷衍する領域においては、親鸞という固有の名前は非常に重要であることは論を俟たない。しかし親鸞という歴史的人物の思想の追求のみがこの領域の最終帰着点であつてはならないというのが筆者の視点である。換言すれば、親鸞の思想を通して、あるいはそれを基礎にして、結局は（阿弥陀仏の名号による救済とはどういう意味か）（何故弥陀の名前（名号）によつて宗教的救済が成立するのか）という素朴にして中心的な問いに対する答、つまり（理）が論理として明らかにされねばならない。それが親鸞の示そうとするところでもあると考えるからである。

結局中心的問いをどのように考えるにしても、その問の答としての（理）を明らかにしてこそ初めて諸言語の壁を乗り越えてあらゆる人々に敷衍できる宗教思想となり得ると考える。本稿においては親鸞がその著述において明らかにし、体系づけようとした思想において、後に示す意味での「歴史」を克服しようとしているということを言語的に固有名詞という観点から明らかにし、同時に宗教的救済について考察するのである。

二、神話、固有名詞からの解放

筆者は「阿弥陀として名づく」と題する別稿⁽¹⁾において親鸞の非神話化について言及した。その論旨は「撰取不捨の故に

阿弥陀と名づく」という句は「本願の故に念仏する」という意味であり、これは正しく「正定之業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」という善導の称名念仏についての言葉の意を表していることになるというものであつた。

この「本願の故に念仏する」という事柄はまた言葉を換えれば本願と名号の関係を表したものであることができる。すなわちこの関係は親鸞が『教行信証』の教巻の中で明らかに示しているように『大経』の「宗教」とは「如来の本願を説く」ことであり、「仏の名号」が『大経』の「体」となることである。そのことを筆者は親鸞の非神話化、あるいは最も簡潔な形での再構成といつたのである。さらにこのことは固有名詞を第二義的なものとして扱ふということを意味している。すなわち、『歎異抄』第二章に見られる有名な一節、

弥陀の本願まことにおはしまさば、
 積尊の説教虚言なるべからず。
 仏説まことにおはしまさば、
 善導の御釈虚言したまふべからず。
 善導の御釈まことならば、
 法然の仰せそらごとならんや。
 法然の仰せまことならば、
 親鸞が申すむね、
 またもつてむなしかるべからず候か。

を親鸞自身の言葉として認めるならば、ここにとり上げられる「積尊」、「善導」、「法然」、「親鸞」という固有名は客観的には歴史的固有名詞であり、重要ではあるが、弥陀の本願を第一義とする限り、これら固有名は第二義的である。むしろ

るそれぞれの「御釈」「仰せ」こそが親鸞にとつての第一義的固有名である「阿弥陀」の本願を説く言説であることを示している。時間系列の中の釈尊や高僧である方々を第二義的固有名詞を持つ現在諸仏として捉えているのである。

この現在諸仏の扱いは、神話としての『大経』の正宗分のはじめ五十四を数える具体的固有名を持つ時間系列の中の過去仏の系譜に対する親鸞の扱いにも見られる。『大経』の過去仏の系譜そのものには親鸞は注意を払わなかったとはいえず、実際にはその最後の五十四番目に挙げられている世自在王仏についてはその名（ところによつては「世饒王仏」あるいは「饒王仏」）をしばしば取り上げている。しかし行巻大行釈中の「易行品」、

いままきにつぶさに無量寿仏を説くべし。世自在王仏―乃至その余の仏まします―この諸仏世尊、現在十方の清浄世界に、みな名をなづ稱し阿弥陀仏の本願を憶念することかくのごとし。³

は、この原漢文を親鸞が、過去仏であるはずの世自在王仏及び「その余の仏」が現在十方の清浄世界に在つて阿弥陀の本願を憶念している、という意味を持たせるように書き下していることを示している。従つて親鸞は時間系列の中の仏および高僧達を現在諸仏として見ているということができるのである。

さて錠光如来に始まり世自在王如来に終わるこの過去仏の

系譜は『大経』を神話たらしめる不可欠な要素である。何故ならば「神話的と呼びうる神々の系図は…それこそ純粹に神話的なものを傷つけずに保持しつづけてきた器にほかならなかつた³」からであり、夥しい神々、英雄たちの名前とは「まさに、そこに無数の神話的登場者が存在しているという徴であり、そこに神話的ロゴス（仏教における法として置き換えられる＝筆者註）が神々の名前となつて顕現しているという秘儀にほかならない⁴」からである。

しかし親鸞の著述に見る限り、先述の如く彼はこの過去仏の系譜を一括して現在諸仏として読み直している。これに対して同じ仏名ではあつても、周知の如く親鸞は『大経』に述べられている阿弥陀仏の十二の異名を「正信偈」に一々挙げているし、また『浄土和讃』の冒頭において「讚阿弥陀仏偈」からその十二の異名を含む三十七を、また『十住毘婆娑論』から三つを取り出し列挙している。

親鸞がしばしば言及する阿弥陀仏の異名として挙げられるべきこれらの名前は十二という数だけに限定されるものであろうか。それはまた三十七の名前に限定されるべきなのであろうか。異名が、ある時は十二、ある時は三十七、あるいは三、というように様々な数で数えられるということはそれらの数が決して確定的、絶対的な数を意味するものではないことを示す。それでは異名の数は幾つあるのだろうか。親鸞が

『浄土和讃』の初稿本において、「有量の諸相ごとごとく」の「有量」について、

うりやう（有量）はせけん（世間）にあることはみなばかり（量）あるによりてうりやう（有量）といふふちほふ（仏法）はきわ（際）ほとり（辺）なきによりてむりやう（無量）といふなり⁵

と左訓する如く、阿弥陀仏の異名の数は無辺際・無量としてよい。無量の名前の数は言葉の総体でもある。換言すればこれら異名が示すところは阿弥陀仏に名づけられた名前が無際限にある名前すなわち仏陀が名前すなわち言葉であることを示す。

以上のように仏陀の固有の名の羅列であつても『大経』中の諸仏の名の系譜すなわち時間系列の中の名前（以下「歴史的固有名詞」とする）と阿弥陀仏の異名とは親鸞は明らかにその扱いを区別していることが分かる。その理由は次のように考えられるであろう。

「神話を（民族の神話）」と「精神の神話」という二種類に分けることができるが、民族の神話とはある民族に固有の、あるいはある言語に固有の神話である。日本的文脈でいえばヤマト言葉話す人々にとつての神話とは『古事記』・『日本書紀』である。そしてそれによつてその神觀念や歴史が規定される。それは記紀を自らの神話として受け入れることによつてこれらの神話がその民族の運命となり、民族にはじめから

下された宿命となることを意味するものである。つまり神話によつて民族が規定され、その歴史が規定されるのである。

親鸞当時の（また現在の）日本の社会が受け入れざるを得なかつた天皇制の淵源をたどれば記紀に表現されている様々な神々の固有の名前の系譜に行き当たるのである。歴史が、従つて社会がこの種の神話によつて規定されるということは、世俗というものが民族の神話、神々の歴史的固有名詞と密接に関連しているということである。この神話は人間をあらゆる面において規定するのである。

ところが「化身土巻」末の『菩薩戒經』からの引文、

出家の人の法は、国王に向ひて礼拝せず、父母に向ひて礼拝せず、六親に務へず、鬼神に礼せず⁶。

や、また『教行信証』後序に見られる承元の法難の経緯を簡潔に示した土御門天皇および後鳥羽上皇に対する批判的立場を表明している一節の背景には、以上のような民族の神話に対する親鸞の批判的洞察を見るのは困難ではなからう。親鸞は大経という精神の神話を民族の神話つまり固有名詞からの自身の解放をもたらすもの（本願の名号）として考えていたのである。

第二の理由として考えられることは歴史的固有名詞は変化するということである。例えば先にした如く、「世自在王仏」という名が「世饒王仏」や「饒王仏」に変化しうる。また親

鸞は『尊号真像銘文』（広本）に、

婆藪般豆は天竺の言葉なり、震旦には天親菩薩とまふす、また、いまはいはく世親菩薩とまふす、旧訳には天親 新訳には世親菩薩とまふす。

と言ひ、また『入出二門偈』には、

婆藪盤豆はこれ梵語なり。旧訳には天親、此は是れ訛なり。新訳には世親なり。是を正と爲す。

と示している。前者においては、同一人物であつても言語、場所、時、翻訳者が変わる事によつてその固有の名前が変わることを示し、また後者では明かに正誤を示しているから、親鸞がなにかの知識を得た後の判断を示している。このようにこれらの文言は、固有名詞についての知識が変わればやはり同一人物の名が変わることを明らかに示している。また親鸞自身もある時期には「綽空」と名のり、またある時は「善信」、ある時は「親鸞」と名のつているのも人の名、固有名詞はその変化の理由が何であれともかくにも変わり得ることを示している。

固有名詞とは社会集団の中で生活することを余儀なくされている人間にとつて、その言葉のもつ意味から離れて、他と弁別するためになくてはならない名詞である。ある研究者によれば、「固有名詞がある」というそのことが、言語が本来的に社会的なものであるということの証拠になる」のであり、

また「固有名詞は宿命として言語の本質的部分を体言している」のである。その理由は「固有名詞こそは、人類が決して一つではなく、さまざまなる名前——固有名詞をもつて分かれ、それぞれが自分たちに対立するものであるということを思い知らせ、相互のちがいをいやが上にもきわ立たせ、それを固定させる道具である。名前、固有名詞こそは、ことばの中でも抜きん出た地位を占めていて、これこそことばの中のことば、名詞中の名詞」だからである。人間は固有名詞に支配されていると言つても過言ではなからう。

更にいわゆる普通名詞であつても多くの場合、話し手は自分の具体的経験に基づく事物（固有名詞を伴うことが多い）を心に描きながらその言葉を用いていてと考えられる。例えば、普通名詞としての「山」や「川」という言葉を用いる時、自分の経験したなじみの深い具体的山や川——京都の人間であれば東山や比叡山など、また賀茂川、高瀬川など——を心に描きながら「山」「川」と言つていてと考えられる。

このような意味において人間は固有名詞を生きているということが出来るが、他との弁別をその基本的な機能とするにも拘らず、この固有名詞・名前は変化する可能性を充分持ち、同時に、ある範疇——民族、性別、家系など——への帰属を表すという特徴がある。

これらのことから言えることは、『歎異抄』にある親鸞の

言葉として伝えられている、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつて
そらごとたはごと、まことあることなきに・・・

という言葉にある「そらごとたわごと」とは、移ろいゆくものという意味において、歴史的固有名詞と置き換えて考えてもよいということである。またその後が続く「ただ念仏のみぞまことにておはします」という念仏は真実教である『大経』所説の本願の名号を示し、この名号が歴史的固有名詞とは異なることを含意している。すなわち本願の名号は歴史的固有名詞の否定としての普遍的固有名詞として成立しているということである。

「南無阿弥陀仏」という称名念仏における名号は、ことばの意味から離れ、あるいは意味を持たないという点において、確かに固有名詞である。しかしこの固有名詞である名号はその時代においても、どの言語圏においても、またどの話し手によつても決して歴史的固有名詞のように変化することはない、常に「南無阿弥陀仏（ナムアミダブツ）」であり続ける。

だからこそ「まこと」「普遍的」と言えるのである。このことは歴史的固有名詞が何らかの民族や家系（いずれも固有名詞を伴う）など、すなわち歴史、社会という範疇への帰属をあらわしているが、名号はいずれの範疇にも帰属しないことを表している。

しかしそれでも名号が固有名詞であるかぎり何かへの帰属を表しているとすれば、それは（何者にも帰属しない）という帰属の仕方、つまり歴史的固有名詞を伴わない帰属の仕方があり得ることを名号は示していると言うことができる。この無帰属への帰属あるいは歴史からの解放は大乗経典の題目中の「仏説」の「仏」や「如是我聞」の「我」と述べた人物にも言えるであろう。それらはいずれも普通名詞であり、歴史的固有名詞から解放された仏弟子達の表現として考えることができるのである。

- 1 『真宗研究』第四十三輯、平成十二年一月、百六頁以降。
- 2 『真宗聖教全書』（以下『真聖全』）二、十二頁。
- 3 高橋英夫『神話の森の中で』河出書房新社、十三頁。
- 4 同右、十五頁。
- 5 『定本親鸞聖人全集』第二巻、八頁。
- 6 『真聖全』二、百九十一頁。
- 7 同右、五百八十四頁。
- 8 同右、四百八十頁。
- 9 田中克彦『名前と人間』岩波書店、九頁。
- 10 同右。
- 11 同右。

〈キーワード〉 神話、固有名詞、歴史

（京都女子大学助教授）